

『オルドス民話収集』(5)
—錢世英著、1999年、フフホト—

児玉香菜子訳

1. テキストについて

本テキストはペンネーム錢世英、モンゴル語名ジャガスが収集整理した『オルドス民話収集』(内蒙古人民出版社、1999年)¹に収められている民話86話のうち、「人物の民話」34話から13話²を訳出したものである³。訳出した民話それぞれの末尾に原題と原書の頁番号および口述者の氏名、採集整理年を記した。これらの主要な採録地は著者の出身地であるオルドス地域ウーシン(烏審)旗⁴であろう(児玉訳2016:121)。

2. 民話13話の内容と特徴

今回翻訳した民話は大きく「笑い話」に分類される話である。

第1話「利口な幼い弟子ラマ」はケチでひどい仕打ちをする師匠ラマを幼い弟子ラマがやり込める話である。同じように弟子ラマが過酷に扱うラマをやり込める話に「子供のお尻に三つの火鉢あり」(趙他編2002:157-158)がある。このように幼い弟子ラマに厳しいラマはやはり存在したようで、中国内モンゴル自治区アラシャー盟エゼネ旗のバンドウさんは弟子ラマだったが火鉢でよく殴られ、ときには頭の形がなくなるほどだったという(児玉ほか2014:313-314)。また、日本の昔話に類話があり、日本では馬であるところが⁶、本民話ではラクダである。

第2話「3人の息子が技能を身につける」はケチな大金持ちが出来の悪い息子たちの身につけた「技能」をお披露目する話である。

第3話「一枚の銅銭」はやはりケチな大金持ちがわずか一文銭のために死んでしまう話である。

第4話「石臼が骨をかじる」はケチな酒屋の主人が腕の立つ職人にやり込められる話である。

¹ 原著名は『鄂尔多斯民间采风』。編者については児玉訳(2016:121)を参照のこと。

² 話の内容にあわせて訳者が掲載順を変更している。本来の掲載順は「石臼が骨をかじる」、「3人の怠け者」、「先生」、ロバを買う」、「先生」と「バカな女」、「タマゴ1個による騒動」、「利口な幼い弟子ラマ」、「若者の干支はヒツジのフンのついたナン」、「3人の息子が技能を身につける」、「3年前のキツネの足跡」、「お前がいてもいなくても、いつものように年を越す」、「今の運転手は怠け者すぎる」、「聞けば聞くほど亡くなった夫を懐かしく思う」、「一枚の銅銭」である。

³ 同著書にはほかに「動植物の民話」28話と「神話物語」24話がある。「動植物の民話」はすべて、「人物の民話」は10話、「神話物語」は2話をすでに訳出している(児玉訳2016;2018;2019;2020)。

⁴ 旗は内モンゴル自治区での行政区の名で、中国の行政単位の県(縣)に相当する。

⁵ ウーシン旗については児玉訳(2016:121-123)を参照のこと。

⁶ 笑い話、愚か者と愚者の「和尚と小僧一馬の落とし物」(稲田1988:486-487)。

この4つの民話に共通するのは主人公がケチであることである。とりわけ第2話の主人公は雇人や乞食に対して大変過酷で、そのためか、その末路は悲惨である。

第5話「3人の怠け者」では主人公の3人はその怠惰ゆえに死んでしまう。

第6話「タマゴ1個の騒動」は貧乏な夫婦がタマゴ1個で金持ちになることを夢想するものの、あつという間にそれを自ら失ってしまう話である。類話に「夫と妻が空想にふける」がある（ウター2016：702-703）。

第7話「若者の干支はヒツジのフンのついたナン」は見た目麗しいが記憶力が恐ろしく悪い青年の話である。

第8話と第9話は学問がないにもかかわらず、さも学があるようにふるまう自称「先生」をあてこすった話である。「先生」は一般に有徳の人に対する尊称である。

第10話から第13話は小話である。第10話と第11話の場面は狩猟である。民話の収集地であるオルドス地域では20世紀に入っても狩猟は生活に重要な位置を占めていた（モスタールト1986:98-99）。21世紀初頭でもウーシン旗では狩猟は収入源の一つであった（児玉2012：51）。

第13話には自動車が登場することから20世紀後半の比較的新しいものと思われる。

第1話、第2話、第7話、第8話、第10話と第11話で舞台となっているのはラクダ、ウシ、ヒツジといったモンゴルの伝統的家畜の登場や登場人物の名前などからモンゴル地域であると想定される。

第5話とはくにその舞台を示唆するような語は出てこない。

これら以外の第3話、4話、6話、9話、12話と13話の舞台は中国、それも主要な採録地であるウーシン旗に隣接する陝西省であろう。第3話では金持ちの象徴としてまずモンゴルの伝統的家畜であるウシとヒツジが1万頭以上とされているものの、期待される葬儀の在り方としてあげられているのは高級棺材や埋葬で、遺族は主人のご臨終の際に涙を流す。他方で、モンゴルでは残された遺族は泣くことは望まれず（小長谷1998：173）、ウーシン旗では風葬が主であった。

語り手はこの第9話と第11話、12話と13話以外はすべて編者銭世英の父、母とおばである。第9話の語り手は趙启雄で、すでに訳出した「2人のけちん坊」の語り手でもある（児玉2016：129-130）。第11話から第13話の語り手は銭世軍とある。銭世軍という名は編者のペンネーム銭世英と一字違いであることから、編者の家族親類の可能性が高く、モンゴル人であろう。

これら13の民話の特徴は、第5話を除いて、その舞台が明らかにモンゴル地域と中国のどちらか分かるものである一方、語り手がモンゴル人でも中国を舞台にする話が語られていることである。ただし、その語りの言語がモンゴル語なのか、中国語なのかは不明である。また、モンゴルといってもその舞台がいち早く定住化が進んで地域の一つであるオルドスであることから、オンドル（第1話）、牧畜民の家の門の敷居（第8話）など定住していることをうかがわせる描写がみられることもその特

徴である。

3. 人物の民話

(1) 利口な幼い弟子ラマ

一人のラマが幼い弟子のラマを引き連れてラクダを引いて天竺へ経文を取りに行った。途中、ラマは幼い弟子ラマをいろいろと虐待し、道中毎日幼い弟子ラマにとっても重い荷物を背負わせ、それにもかかわらず、幼い弟子ラマに一度も十分に食べさせたことすらなかった。しかも、いつも幼い弟子ラマをたたいたり、ののしったりしていた。

ある日の昼、ラマたちが歩き疲れた時に、道ばたに家が1軒あるのが見えた。ラマは中に入って休んでからまた行こうと言った。中に入った後、ラマはオンドル⁷の上に座ると、幼い弟子ラマに食糧⁸が入った袋を手渡すように大声で叫んだ。幼い弟子ラマは声に出して答え、食糧が入った袋を手渡した。ラマは袋を受け取ると、一人でむしゃむしゃと食べ始めた。だが、幼い弟子ラマには一口もあげなかった。幼い弟子ラマはおなかが空いているのを我慢し、ラマが大きな口をあけて食べているのを見ていた。突然、食べ物が一かけら下に落ちたのが目に入った。幼い弟子ラマはおなかが空いて死にそうだったので、前の方に進み出て、それを拾いあげて食べた。ラマは家の人の前では何も言わなかった。しかし、家を出ると口汚なく幼いラマを罵倒した。

「恥知らずなクズだ。地面に落ちたものを拾って食べるなんて、師の面汚しだ。」

また、大声で責め立てて言った。

「今後、もし、おまえが地面に落ちたものを拾ったら、手のひらでビンタをくらわせてやる。」

ラマは幼い弟子ラマを連れて道を急いだ。ラマはラクダに乗って前を歩き、幼い弟子ラマは荷物を背負って後ろから歩いてついていった。途中まで行ったところで、干し肉の入った袋が1つ、突然ラクダの背から落ちてきた。幼い弟子ラマはそれを見たが、拾わなかった。夜に足を休め、夕食を準備するときに、ラマは干し肉の入った袋がないことに気づいた。すぐに幼い弟子ラマに尋ねた。

「干し肉はどこへ行った？こいつめ、盗み食いしたのか？」

幼い弟子ラマは答えた。

「わたしが食べたものではありません。途中で地面に落ちました。」

「愚か者！なら、お前はなぜ拾わなかったのか？」

「当然拾いたかったのですが、先生の教えを思いおこし、それであえて拾いませんでした。」

ラマは心の中でとても怒っていたが、自分の言ったことと筋が通らないので、言葉が出なかった。にくたらしい声で言うほかなかった。

⁷ 華北で、家屋の内部の一部分をレンガで積み上げ中を煙が通るようにして火をたく暖房設備。オンドルがあることから固定家屋であることがわかる。

⁸ 原典は「干糧」。干糧とは携帯用の乾燥食品で、チーズ、炒ったキビ、干し肉など。

「愚か者よ、覚えておきなさい。今後からラクダから落ちたものは必ずすべて拾い上げなさい。もし拾わなければ、お前を殴り殺すぞ。」

幼い弟子ラマは胸いっぱい屈辱を腹の中に飲み込んで、「後で見ている」と心の中で思った。

翌日、ラマはまたラクダに乗り、幼い弟子ラマに荷物を背負わせて歩かせた。疲れたのか、進めば進むほど、幼い弟子ラマとラクダとの距離は離れていった。ラマが昼に休憩地についたとき、長いこと待つようやく弟子ラマが着いた。ラマは非常に怒った様子で弟子ラマを叱りつけた。

「怠け者め。なぜ早く歩かないのだ。急いでいるのにこんなに時間がかかって何の罪に該当するか？大罪だぞ。」

言いながら、弟子ラマを殴ろうとしたとき、弟子ラマは言った。

「先生、どうぞ怒らないでください。弟子のわたくしは今日歩くのが遅いには理由があります。今日はラクダから落ちてくるものが特に多く、拾わないと先生から殴られ、ののしられるのを恐れました。それで道中ずっと休まず拾ってきました。そのために、このように遅くなったのです。」

ラマはそれを聞いてすぐに気になって尋ねた。

「えっ？今日またラクダから何か落ちたのか？早く持ってきて、わたしに返しなさい。」

幼い弟子ラマは言った。

「わたくしは空の袋を持っていなかったのだから、拾ったものをすべて食糧の袋の中に入れました。」

と言いながら、食糧の袋を手渡した。ラマは待ちきれずに食糧の袋を開けてみると、なんとラクダのフンが袋いっぱい入っていた。ラマは大変怒った。しかし、自分が話した言葉には確かに足りないところがあり、ぐっと我慢して黙っているほかなかった。しかも、心の中でひそかに自分の徳に欠けた行動を慎まなければならない、と考えた。

《原典》原題「聰明の小喇嘛」97-98頁。 ガチンガ（著者のおば）口述 1990年収集整理

（2）3人の息子が技能を身につける

むかし、バスーという名のあばたの金持ちがいた。バスーは家畜が多く、数えきれないほどだった。ツァガンデレス草原⁹の広い盆地いっぱいに群れを広げて、ようやく数えることができた。バスーのたくさんの広くて大きいモンゴル・ゲルの中にはこれまたたくさんの金銀財宝と甕に入った乳製品がところ狭し、と並べてあった。バスーの富について、実に遠くまで知れ渡っていた。

バスーは大変なお金持ちだったが、実にとんでもないケチだった。彼は長期の使用人に対してさえ、満足のいく食事を一度だって与えることを惜しんだ。使用人たちは毎日朝早くから夜遅くまでバスー

⁹ バヤンノール（巴彥淖尔）市ウラト（烏拉特）後旗に同名の村がある（私信、サランゲレル教授）。

のために家畜を放牧したが、持参させる食糧は小さなお椀の半分しかない、わずかないりこ¹⁰とやかんに入れた冷たい水だけだった。乞食が彼の家の門を通りかかり、飢えて喉が渴いて、一口の食糧や水を乞いても、バスーは一粒のコメさえ、一口の水さえも施すことをいつも惜しんだ。

バスーには道楽があり、とりわけ人に自分の家のことをひけらかすことを好んだ。彼はいつも人に向かって自分にどれほどの富があり、自分の息子がいかにかわいいかをひけらかした。

バスーには3人の息子がいた。幼いころから甘やかされ、食べることだけが好きで怠け者の仕事ぎらいで、20歳をすぎても、何もできなかった。そのため、バスーが3人の息子を自慢するたびに、人びとはわざとあざ笑って言った。

「イヌの屁だって、あの3人のバカよりました。」

このことはバスーをかんかんに怒らせた。もともと、バスーは3人の息子が技能を身につけようが、身につけまいがどうでもよく、今ある財産は3人の息子とその下の世代も苦労しないほどに十分であると考えていた。だが、今、息子に技能を少しも身につけさせないことには、バスーの虚栄心を永遠に満足させることができない。そこで、彼は3人の息子を自分のところに呼び出して言った。

「息子たちよ。おまえたちはもう子どもじゃない。家を出て遠くに行き、何か技能を身につけてこななくてはならない。それでこそ祖先の名をあげるといふものだ。」

次の日、3人の息子たちは技能を身につけに家を出た。出発際に、バスーは3人の息子に言い含めて言った。

「よく学んできなさい。一人一人皆必ず技能を身につけてくるように。3年学んだあと、家に帰ってきて、父さんが自らお前たちのために盛大な祝宴を開くぞ。しかも、お前たち3人はみんなの前で技能の腕比べをする。俺様バスーの3人の息子がどれだけ優秀か広く知らしめてやる。」

3人の息子たちはそれぞれ方向を選んで出発した。

バスーは毎日、毎月、毎年待ち望んでいた。3年の月日がようやく過ぎ去り、3人の息子がついに皆帰ってきた。バスーはすぐに長男に尋ねた。

「おまえはどんな技能を学んだのか。」

長男は自分が一番良い技能を学んだと思い、わざともったいぶって言った。

「俺たち3人がみんなの前で技能比べをするときに分かるでしょう。」

バスーは向きを変えて、次男と三男に何を学んだのかを尋ねた。次男も三男も皆長男の様子をまねて言った。

「俺たちがみんなの前で技能比べをするときに分かるでしょう。」

バスーはこれを聞いて大変喜んだ。

バスーは前代未聞の気前の良さで、宴会を設け、大勢の人を招待した。それは皆に3人の息子たち

¹⁰ うどん粉をほうろくでこんがり焦がしたもの。

が学んだ技能をひけらかすためだった。近隣の人たちはバスの3人の息子が一体どんな技能を身につけたのか、好奇心で見物にやってきた。

酒宴が始まった。主賓の席に座ったバスーは有頂天になっていた。客たちは正装をしたバスーを眺めながら、何度もここそささやいていた。その時、一匹のハエがバスーの剃ってつるっげになつたあばた頭の上にとまった。バスーは手で頭を払ったので、ハエはすぐに飛び去った。しかし、ハエはまるでバスーのあばた頭が特に気に入ったようで、ふとみると、室内を「ブーン、ブーン、ブーン」と何回か飛びまわると、またバスーのあばた頭の上にとまった。長男はこの様子を見て、心の中でこれはまさに大勢の前で大いに腕前を見せるまたとない機会だと思いをめぐらした。長男が学んだのは弓術の技能だったので、まさに腕比べの際に動かないのを心配していた。彼はこのように考えながら、身につけていた弓矢をすぐさま取り出すと、父親の額の上のハエに狙いを定めて矢を放った。不幸なことに矢はハエには当たらず、バスーの額に当たった。バスーは痛くて

「あっ」

と声をあげて地面に倒れた。血がたちまち傷口にそって流れ出て止まらない。皆慌てふためいてバスーを抱え起こし、いつとき、どうしたらいいのか分からなかった。この時、次男は自分の出番が来たと思い、言った。

「皆さん、慌てないでください。こんな小さな傷、わたしが処置します！」

次男が学んだのは大工だった。次男はまるで手品のように大工道具と木の棒を一つ探し出すと、バタバタと数回斧で木の棒をたたき切って釘の形にし、かんなを取り出し、その釘に数回かんなをかけ、かんなをかけ終わった木の釘を父親の額の流血している傷口の上にふさぐと、かなづちで2回たたいた。痛くてバスーは

「ひいひい」

と大声で叫んだ。しかし、それでも血は止まらなかった。ずっとそばで立って見ていた三男は心の中で考えた。「一番上の兄さんも二番目の兄さんも、技能はたいしたことはない。本当の腕前を見せるにはやはりわたしの出番だ。」三男は飛ぶように早く小さな溶鉱炉を運んでくると、ふいごを置き、しばらくごたごたとして、小さじ1杯分の鉄を溶かして、父親の傷口に流し込んだ。ただ張り裂けるような叫び声が一声聞こえた。バスーは二度と起き上がらなかった。

《原典》原題「三个儿子学本领」101-103頁。 バーバー（著者の父）口述 1992年收集整理

（3）一枚の銅銭

昔、大変な守銭奴でけちな金持ちがいた。彼の家にはウシとヒツジが1万頭以上、穀物が千石以上（1石=60キロ）、絹織物は100匹以上（1匹=40ヤール）あった。しかし、彼は、自分と家族がお

腹いっぱいになるほどのご飯を食べることも、新しい衣類を着ることさえも惜しんだ。

彼の家には子や孫がたくさんいた。しかし、家族はみんな彼と一緒に百万の富を守りながら、貧しい日々を過ごしたくなかった。そこで、いつも彼が家にいないときにこっそりのご馳走を食べていた。

あるとき、家族がちょうど食事をしている時に、彼が遠出から帰ってくるのが見えた。すると嫁は急いで事前に用意していた一握りの豆を庭にまき散らした。金持ちは庭に入ってすぐ、あたり一面散らかっている豆を見るとすぐにもったいない、としゃがんで一粒一粒拾い始めた。声を張り上げながら、罵った。

「ごくつぶしたちよ、聞きなさい。今日、これはまた、あの犬畜生がすることだ。豆を一面にまき散らして、わしに一粒一粒拾わせるなんて・・・」

彼は罵りながら、拾った。家族は食べながら、こっそりと食事と金持ちのその様子を楽しんだ。彼が拾い終わった時には、家族は食べ終わり、片付けが終わっていた。

ある日、金持ちは外出して戻る時に、道端に1枚の銅銭が落ちているのに気が付いた。たちまち目を輝かせて喜んだ。

「おっ、一文銭だ。」

金持ちは前後左右を見て、誰もいないのを確認すると、急いで腰をかがめてその一文銭を拾いあげた。数歩、歩いたところで、子どもが前から走って来てこの金持ちに尋ねた。

「おじいさん、一文銭を拾いませんでしたか。」

金持ちは言った。

「拾ってないよ。」

しかし、彼はびくびくして、その子どもが、彼がその一文銭を拾ったことを見つけるのを恐れて、子どもが気が付かないすきに、急いで一文銭を口の中に押し込んだ。

子どもは彼が話すのがはっきりしないので、尋ねた。

「おじいさん、口の中に何が入っているのですか。」

彼はあわててそのお金を飲み込んだ。はからずも、そのお金は上にも下にもいかず、ちょうど咽喉に詰まってしまった。

子どもは去っていった。金持ちは心の中で道中一文銭を得たことを喜んでいた。

家に帰ると、妻は金持ちが息が詰まって黒みがかかって紫色になっているのを見て尋ねた。

「どうしたのだい？」

彼の咽喉に銅銭が詰まっているため、話ができず、しかし、とてもうれしそうに妻の前に指を伸ばして少し動かし、一文銭の手まねを作った。その後、自分の咽喉を指した。意味するところは、彼は一文銭を拾い、のどに隠したと。

楽しみが極まると悲しみが生じることを誰が知っていたであろうか。その一文銭は金持ちの咽喉の

中で上にもいかず、下にもいかず、丸三日たった。咽喉をふさいでいたので、だんだん呼吸が難しくなってきた。見るからに、生命が危機に瀕していたが、彼の頭はとてもはっきりしていた。彼はオンドルの上に横たわりながら、妻に向かって3本の指を伸ばし、呼び出す仕草をした。妻に3人の息子を皆呼びつけさせ、葬儀の手配をするためだった。

3人の息子が皆やってきて、金持ちの前を囲んだ。彼は話をしたがったが、ずっとはっきり言えなかった。金持ちは「んん、ああ」と言いながら、手まねをした。長男は考えながら尋ねた。

「父さん、亡くなった後にわたしたちが手厚く葬らないのを心配しているのですか。そういうことでしたら、安心してください。わたしたちは必ず最も高価で、最もよい柏木の棺桶¹¹をつくりますから……」

金持ちは長男の話聞き終わらないうちに、必死に首を横に振り、手を振った。

次男はしばらく考えて言った。

「父さん、亡くなってから、葬儀は簡略化し、棺桶も作る必要がなく、むしろでまいて、埋葬すればよいですか？」

金持ちは次男の話聞いてまた首を振った。だが、さきほどの死に物狂いで振ったようではなかった。

三男はすぐに理解して、言った。

「父さん、亡くなってから、むしろでまく必要すらない。直接運び出して、穴を掘って埋めたらいいのでしょうか？」

金持ちは三男の話聞き終えると、首を縦に振って微笑んだ。彼はまなごしを妻に向けると、妻は涙を浮かべながら、彼に必ず申し越しのとおりになると応じた。

金持ちはやっと目を閉じた。

妻と3人の息子はいっぺんに声をあげて泣きだした。しばらく大騒ぎしていると、思いもかけず亡くなった金持ちはゆっくりと息を吹き返してきた¹²。彼は目を見開いてあたりを見まわした。

「おまえさん、まだ何か心配なことがあるのですか。」

妻は泣きながら尋ねた。

金持ちは自分の咽喉を指さした。妻は尋ねた。

「おまえさん、もしかして死んでから、息子に刀でお前さんの咽喉をがち割って、その一文銭を取り出して取っておけと。」

金持ちは懸命に首を縦に振ってから、息を引き取った。

《原典》原題「一枚銅钱」108-110頁。バーバー（著者の父）口述 1992年収集

¹¹ すでに訳出した「9人の息子は石ころにも及ばない」でも最も高級とされる棺桶は柏木である（児玉2020：404-406）。

¹² ケチな主人公が息絶えてからまた息を吹き返し、節約を念押しする箇所は明末の馮夢龍による『広笑府』の「遺言」にもみられる（駒田編1978：52, 415）。

(4) 石臼が骨をかじる

張じいさんは大変腕のいい石工で、精白用の臼をのみで溝彫りする。精白がうまくいかない家があっても、張じいさんにちょっと調整してもらえば、たちまちよくなった。姓を呉という酒屋の主人はそれを聞くと、急いで人を遣わしてその石工の張じいさんを呼びよせた。

酒屋では穀物を使う量が多く、精白用の臼も朝から晩まで休む暇がなく、実によい石材でも調整なしには使い続けることはできない。このために長期で石工を雇わなければならなかった。ただ、この酒屋の店主は大変有名なケチで、たいていの職人はこの店主と付き合いがらなかった。

張じいさんは年を取り、あちこち歩き回りたくないと考えた。それで、店主に相談されてすぐにその酒屋で働くことを承諾した。手間賃は応相談、宿食込み、年末に店主の良心に従ってさらに食糧を支給する、というものであった。

呉店主はこれを聞くと大喜びした。なぜなら、店主が最も恐れることは人が自分と駆け引きすることであり、最も惜しいと思うのは自分の鍋の中から人さまに飯を盛ることであったからである。店主はこの腕が優れて高名な石工のじいさんが駆け引きもせず、手間賃の実際の額を決めずに、承諾して働いてくれるとは夢にも思わなかった。そのうえ、呉店主は「良心に従って」手間賃を支払うのだ。店主がうれしく思ったのは、この「良心に従う」であった。心中、考えた。「なにが良心に従うだ？良心はいったいくらだ？石工の張じいさんは自分で前もって決めなかったのだ。そのときが来て、わしあげるのが少なくても悪く思うなよ。」

石工の張じいさんは以後、呉店主の酒屋に住み込み、精白する石臼をのみで溝彫りした。呉店主は毎日家族に、石工の張じいさんに食べ物のかすをこねて蒸してパン状にしたもの¹³、大根の漬物と白菜の湯漬けを届けさせ、腹の足しにさせた。呉店主は張じいさんに油、肉、米や小麦粉を少しでも与えるのが惜しかった。しかしまた、張じいさんが粗末な食事がゆえにやる気を失い、仕事を怠け、しっかり仕事をしなくなるのを恐れて、いつも石工の張じいさんに自分たちは貧乏だと泣き言を言っていた。

「わたしは店主になり、酒屋を開いたといっても、先祖の暮らし向きは貧しかったため、経済的な土台が弱く、今に至るまで生活は裕福ではなく、家族みな衣食を切り詰めていて、それでも、ときに衣食に事欠くことがあります。あなたさまはわたしめの貧しい拙宅にいらして、わたくしにつきしたがって苦しい目に合っています。ですが、どうかご安心してください。わたくし呉店主の家がいつの日か美味しいご飯にありつけないときが来たら、必ずあなたさまを忘れません。」

張じいさんは粗末な飲食物を気にとめるどころか、かえって、呉店主の思いやりのある言葉に感激した。そこで、さらに仕事に精を出すようになった。

¹³ 原文は「糠窩窩」。糠は食べ物のくず、かす。窩窩はトウモロコシ粉と大豆粉とを混ぜて円錐形にして蒸した食品で、粗末な料理の代表。糠窩窩は食べ物のかすを混ぜて蒸して作ったパン状の食品ということになり、さらに粗末な料理を意味する。

ある日、張じいさんは今ある仕事が終わったので何もすることがなく暇で、呉店主の母屋に世間話をしに行くと、ちょうど店主家族みんなで煮た羊肉を食べているところだった。

呉店主はこの張じいさんがちょうどよくやってきたのを見て、本当に困ってしまった。鍋にふたをして肉を隠すにはすでに遅い。じいさんに肉をあげるか。でも、一口でさえ惜しい。だが、あげなければ、じいさんを怒らせ、しっかり仕事をしてもらえなくなるのを恐れた。もったいぶって張じいさんを呼んで座らせ、自ら箸で大皿の中をあっちでもない、こっちでもない肉を選んでいる素振りをした。張じいさんは呉店主が本当に誠心誠意自分のために美味しい肉を選んでくれていると思っていた。差し出されたのはまさか煮すぎて肉がついていない一切れの骨であった。

張じいさんは何も言わずに骨を受け取ると、何口か噛んだふりをしてから骨を下におき、上品に礼儀正しく辞去した。

数日がたち、店員が慌てて走ってきて呉店主を呼んで言うのは、大きな石臼が使えなくなってしまったと。呉店主は言った。

「挽けなくなったからといってわしのところに来て何の役に立つのだ。早く石工のところに行って直してもらえばよいだろう？」

店員は店主に言った。

「石工が修理すると、耳が聞こえないだけでなく、口がきけなくなってしまったようにますますひどくなってしまいます。」

店主はこれを聞くと慌てて店員と一緒に製粉場に見に行った。不思議なことだ。これは何の不具合だろうか。本来、臼を挽くと、穀類の粉は具合よく、臼の2つの隙間から等しく流れ落ちてくるものである。しかし、今はこの臼はゴロゴロと空回りし、ごく小さい裂け目から一つまみの粉が流れ落ちているだけである。そのほか大部分の隙間からは少しも出ていなかった。

「この石工の張じいさんは評判のとていい職人でなかったのか？なぜうちの家に来たら働きが悪いのだ？怠けたいのか？」と呉店長がこのように考えながら、店員を急いでやって張じいさんを迎えられた。

「呉店長、わたしに何か御用でしょうか。」

と張じいさんはたずねた。

「おまえさんはわたしに聞くのかい。なんとまあ、恥ずかしくないのかい？」

呉店長はぶんぶん怒って言った。

「なんですって？わたしが溝彫りした臼はとてよいいではありませんか？」

呉店長は張じいさんが面と向かって非を認めないのを見ると、店員たちにその場で臼を数回、回させて見せた。

張じいさんは思惑があり、見もせずに着いて言うのは、

「ああ、お前さんがおっしゃっているのはこれですか。この故障は少しよくないものです。これは臼が骨をかじるといいます。」

呉店主はすぐにピンときた。あのとき、職人のおじいさんに骨をかじらせるべきでなかったと後悔した。よく考えれば、実際失礼であり、けしからんことである。そこで、店主は口調を変えて、

「あたまさま、お肉を食べたいと、はっきりおっしゃって下さいよ。このようにわたくしめをからかう必要はありません。」

と言い終わるとすぐに、急いで家族に張じいさんに肉を煮るように言いつけた。

張じいさんが笑って言うのは、

「それならなんでこんなよけいなことをする必要があるのか。人をからかうだつて。これはおそらく人をからかうのが好きな人から学んだものです。今後は人として物事にあたるときは人の身になって考え、礼儀正しく、まじめになさい。」

言い終わると、人を呼んで上の臼盤を持ち上げさせ、石工が軽く斧で叩いただけでその「故障」を直してしまった。

《原典》原題「磨喙空骨頭」86-88頁。ウサラゴワ（著者の母）口述 1988年收集整理

（5）3人の怠け者

3人の怠け者が連れ立って道を急いでいた。歩いていると、真正面から黒山のようなカラスの群れが飛んでくるのが見えた。3人の怠け者はおのおの心の中で考えた。「大変だ。今日はひよっとするとカラスに食べられてしまうかもしれないぞ。」

3人の怠け者は皆カラスに食べられるのを恐れ、かつまた腰をかがめて石を拾い、カラスに投げるのもおっくうだった。それどころか、こっそりと心の中でこうしようと決めた。「もし3人が皆這いつくばって、1人がもう1人の体の上に積み重なる。そうすると、カラスが食べようとするときに、必ずついでには先に一番上になっている人の肉で、一番下の人間が助かるのはうけあいである。」

3人の怠け者はそれぞれ皆このような妙案を思いついた。だが、口には出さなかった。もし話してしまったら、誰が一番上になりたがるだろうか。そこで、3人の怠け者はわざとそそのかしあってケンカをはじめた。ケンカをする時に皆殴られてもいないのに自分から倒れた。しかも、一番につまずき倒れようと争って、もう一人が殴ってきて自分の上にのしかかってくるのを待っていた。しばらく待っても待ちきれず、地面より起き上がって、また殴るしかなかった。繰り返し殴り合っていたが、見るとカラスはとっくに飛び去っていた。3人の怠け者は心の中でしきりに無駄なケンカをしたことを悔やんだ。

3人の怠け者たちはまた歩き続けた。林の中に入った時、すでに空は暗くなっていた。遠くからト

ラとオオカミの鳴き声が聞こえただけで、驚いてあえて前に進もうとはせず、荒れ寺に逃げ隠れた。

荒れ寺の中はガランとして誰もいなかった。3人の怠け者はトラがついて入ってくるのを恐れたが、一方で、戻って寺の入り口を閉めるのを面倒に思った。それで、争って壁の隅に押し合い押し合い、めいめい抱き合いながら、それぞれ考えていた。「トラがもし本当に入ってきたら、俺がまず胸に抱きかかえているこの怠け者を押し出してトラに食べさせ、トラがこやつを食べている間に素早く逃げ出そう。」

夜中になったが、トラはやってこなかった。しかし、とても寒くて凍え死にそうである。3人の怠け者の中で年上のが二番目に向かって言った。

「お前さんは若い。だから、外に行つて俺たちに薪を拾つてきて、焚火をして俺たち仲間に暖をとらせてくれ。」

2番目の怠け者がお腹を手でおさえながら言うのは、

「おなかが痛くて、一步も動けない。」

しばらくして、本当に寒くてどうしようもなくなつてしまった。年が上から二番目の怠け者は一番年下の怠け者に向かって言った。

「お前さんは若い。早く外に行つて俺たちに薪を拾つてきてくれ。焚火で俺たちに暖をとらせてくれ。」一番年下の怠け者は足を手で押さえながら言った。

「足が痛い。とても痛い。一步も進めない。」

またしばらくして、凍えてもう我慢できなくなつた。一番年下の怠け者は一番年上の怠け者に向かって言った。

「おまえさんは力が強い。外に行つて俺たちに薪を拾つてきてくれ。火をたいて俺たち3人を温めてくれ。」

一番年上の怠け者は慌てて、頭をさすりながら言う。

「あれまあ、頭痛がひどくて我慢できない。一步も動けない。」

3人の怠け者は寒くて歯を食いしばり、みんな暖を取るのを待ち望んでいたが、一方でおっくうで体を動かしたくなかつた。最後には無惨にも荒れ寺の中で凍死してしまつた。

《原典》原題「三个懶漢」89-90頁。ガチンス（著者のおば）口述 1988年収集整理

（6）タマゴ1個による騒動

梁貴貴と米多多は怠け者の夫婦だつた。その日暮らして、貧しく落ちぶれ、食うや食わずのときもあり、そのときはあちこちから借りたり、もらつたりした。借りるともらうは同じで、どのみち1回も返したことがなかつた。人びとは笑いものにして言った。

「のみが多すぎたら、かゆくなくなる。借金が多すぎたら、悩まなくなる。」

この夫婦は裕福な人を見ると心底うらやましく、いつも家が栄え、金持ちになる壮大な計画を一緒に立てるものの、計画を立てては変え、結局行動しない。そのため、自分で恥ずかしくなる時もあるが、毎回、いつもこのような一言で自らを慰めていた。

「まあ、のんびり行こう。」

ある日、梁貴貴は外出して世間話をして回り、帰るときに道でタマゴ1個を拾った。梁貴貴は思いもかけないことに喜び、タマゴを両腕で捧げるように持ち、満面の笑みを浮かべて走って家に帰った。

米多多は夫の様子を見ても、全く納得できずに言った。

「タマゴ1個拾っただけでそんなにおかしくなったみたいにうれしいのかい？」

梁貴貴は負けずに言った。

「でも、これは1個のタマゴだ！」

「ただのタマゴ1個でないのかい？それがあつたところで、わたしたちが金持ちになれるわけではない。それがなくても、これ以上貧しくならないよ。」

梁貴貴は言った。

「それみたことか。道理でみんなお前さん女は髪だけ長くて見識は狭いと言うのだよ。少しも脳みそがない。お前さん、考えてもみなさい。わたしたちがこのタマゴを孵化し、ニワトリに育てたら、ニワトリは卵を産み、卵が孵化してニワトリになり、ニワトリが群れになったとき、ニワトリをメスヒツジと交換する。メスヒツジが子ヒツジを生み、その子ヒツジが大きくなったらまた子ヒツジを産み、ヒツジが増えたら、そのヒツジを1頭の幼いメスロバと交換する。幼いメスロバを育てて、ウマをかけ合わせて、ラバの子を産んで、それを大きく育てたら、何とでもなるぞ！お前、考えてもみろ。家に1頭のラバがいるなんて、なんて景気がいいのだろう。そのときにはそのラバで耕やそうと思えば耕し、ラバに荷車を引かせようと思えば引かせる。憂いの多い暮らしが豊かになるのではないか？」

米多多は聞いているうちに、うれしくてにやにやしていた。こらえきれずに口をはさんだ。

「あれまあ、それは本当にすばらしいですね。小さいロバが大きくなったら、何を言ってもまず、わたしはそのロバに乗って実家に帰らねばなりません・・・」

言い終わらないうちに、梁貴貴は米多多にとびかかり、殴り蹴った。米多多は鼻が青黒くなり、顔が腫れあがった。

「普通に話をしていたのに、なんで突然怒り出したんだい？なんで人を殴るのかい。」

米多多は涙声で尋ねた。

梁貴貴は言った。

「お前さん、聞くまでもないよ。俺さまは、わたしたちのロバのおなかの中にラバがいるとはっきり言ったろう？それなのにお前さんはロバに乗って実家に帰るだあ。山は険しく、道は遠い。宝物のラ

バの子を流産してしまったらどうするのだい？」

米多多も考えればその通りだと思い、泣いていたのが急に笑い出した。2人は続けて得意になってしばらく計画しあっていたが、ご飯を食べていないことを思い出した。米多多は火をおこし食事の準備を始めるために外にまきを取りに行った。梁貴貴は1人で家にいて、突然おなかがグーグーなって我慢できず、そこで台所道具をひっかきまわし、何か残りもののスープやごはんをみつけて飢えを満たしたいと考えた。だが、何もなかった。そこで、あの1個のタマゴに目がくぎ付けになった。心の中で考えた。今日は、わたしたちはタマゴを1個拾うことができた。それなら、明日は金のタマゴを拾うことができるかもしれない。

「ああ、家が栄え、金持ちになるは一大事である。焦る必要はない。のんびりいこう。」

そこで、彼はそのタマゴに小さな穴をあけると、ぐいっと、生のままおなかの中に飲み下してしまった。

《原典》原題「一顆鸡蛋的风波」95-96頁。ウサラゴワ（著者の母）口述 1988年收集整理

（7）若者の干支はヒツジのフンのついたナン¹⁴

ある若者は眉目秀麗で、体格もたくましかったが、頭が悪く、記憶力が恐ろしく悪かった。20歳すぎにもなったが、まだお嫁さんを見つけられず、若者の両親、親戚友人たちは皆、彼のためにやきもきしていた。

ある日、遠いところに住んでいる親戚がこの若者の家にやってきた。若者がひとかどの人物で、容貌も体格も欠点がないのを見たうえで、若者の両親の悩みを聞き、納得できない様子で言った。

「こんなによい若者がなぜ恋人を見つられないと悩むのですか？こうしましょう。わたしの良い友人に娘が1人います。年は18です。まだ縁談はありません。甥っ子をわたしと一緒にお見合いに行かせましょう。うまくいくかもしれません。」

若者の両親はそれを聞くと、とても喜んだ。慌てて息子を外に連れ出して、ひそかに、息子にお見合いの時に何を話すべきか、何を話すべきではないかを一字一句教えた。息子が自分の年齢と干支を覚えられないのを心配して、わざわざ教えたのだった。

「お見合い相手の家に行き、相手方のお母さんがもしお前さんの年齢を聞いてきたら、お前さんは、わたしは今年で25歳になります、と言いなさい。もしまた干支を聞いてきたら、おまえさんは卯年と答えなさい。覚えたかい？」

若者は

「覚えた。」

¹⁴ 小麦粉をこねて、平たく円盤状にして焼いたもの。

と言った。しかし、家を出て数歩と行かないうちにすべて忘れてしまった。若者は引き返してきて母親に尋ねた。

「母さん、母さん、僕は今年何歳だっけ。干支は何だっけ。」

「あーあ、どうしてこれっぽちの記憶力もないのかい？」

若者の母親は仕方なく、小麦粉をこねてウサギの形を作り、またヒツジのフンを 25 粒拾って、息子の懐と一緒に押し込み、言い含めて言った。

「必ず覚えておきなさい。その時になったら、お前さんは何歳ですか、と聞かれます。お前さんがもしそのとき思い出せなければ、手を懐に入れて、こっそり、この 25 粒のヒツジのフンを一つ一つ数えなさい。これはお前さんに何歳かを思い出させるものです。数え終わったら、お前さんは数えた数通りに 25 歳だと告げなさい。もし、お前さんが干支を聞かれて、また思い出せないのなら、もう一度手を懐に伸ばして母さんがお前に小麦粉をこねてあげたウサギをなでなさい。これはお前さんの干支がウサギだということを思い出させるものです。お前さんは撫でたらすぐに思い出せますよ。その後、礼儀正しく、自分の干支はウサギと答えなさい。分ったかい？」

「分かったよ。本当に素晴らしい方法だね！」

若者は喜んで親戚について遠くにお見合いに行った。

娘の家に着くと、会釈し、あいさつをし、若者の親せきは主人に向かって、やってきた理由を説明した。娘の両親はこの若者が、見た目がよいのを見て、かなり気に入った。娘の母親はミルクティーをついで、丁寧に手渡した後、尋ねた。

「若者よ、今年何歳ですか。」

若者は焦って、自分が何歳か忘れてしまった。慌てて懐の中に手を入れて探った。探って探って、3 つのヒツジのフンだけ手に触れたので、そのまま答えた。

「わたしは今年 3 歳です。」

娘の母親ははなはだおかしく思った。また尋ねた。

「おまえさん、干支は何ですか？」

若者はまた思い出せず、懐に手を伸ばし、探った。探してすぐに大きな平らなナンに触った。しかも、たくさんのヒツジのフンがついていた。もともと小麦粉をこねて作ったウサギは懐の中で押しえつけられて、形が変わっていた。しかも、若者はとっくの昔に母親が小麦粉をこねてウサギを作ってくれたことを忘れてしまっていた。それで、どもりながら答えた。

「わたしの干支はヒツジのフンがついたナンです。」

《原典》原題「属羊糞蛋烙面饼的小伙子」99-100 頁。ガチンガ（著者のお婆）口述 1990 年収集整理

(8) 「先生」と「バカな女」

ある若者は少し字が分かるようになっただけで、自分はとてもすごいと考えるようになり、その若者は自分で自分のことを「先生」と呼んでいた。「先生」は機会があれば、いつでも自分の「学問」をひけらかしたいと思っていた。しかし、その若者を尊敬する人はおらず、ひそかに彼を知ったかぶりだとあざ笑っていた。

この日、「先生」は外出してぶらぶらしていると、道ばたに人だかりができていたのが見えた。「先生」は心の中でひそかにおかしく思った。「バカな奴はいつも不思議に思うものだ。」彼は高潔なふりをし、頭をあげ、胸をそらし、人だかりのそばを通り過ぎていった。数歩も行かないうちに、直観的に、誰も自分を気にも留めていないことが分かった。内心むかむかするとともに、奇妙に思った。これらの人たちはいったいなぜこのように夢中になっているのだろうか？見てみるのも悪くない。

そこで、「先生」は引き返して見に行った。そこには、毛皮の裏地をつけた着古した服を着た一人の牧畜民が真ん中に座って昔話、歴史や時事について話しているところであった。囲んでいる数人はみんな夢中で聞きいていた。

「先生」はこのありさまをみて、まったく納得がいかなかった。フン、そいつを見ると、全身貧乏でみすばらしいでたちで、図体ばかりでかくて、バカの見本みたいだ。一目で奴が一文字さえ知らないのが分かった。それにもかかわらず、大路地端に座り込んでへらへら口をたたいている。まさに、トラ去って、サル威張る¹⁵。そこで大声で尋ねた。

「おい、そこのおじさん、聞いているとお前さんはもっともらしくほらを吹くね。本によってほらを吹いているのか？それとも勝手に作りごとをしているのかね？」

「もちろん本さ。」

この若者がこのように無礼なのを見て、その牧畜民はすごくいやな気分になって、口から出まかせを言った。

「えっ？本によるだって？」

「先生」は意地悪く言った。

「お前さんの本はどこにあるのですか。わたしにちょっと貸して見せてくれませんか？」

「よいとも。明日お前さんは自分でわたしの家に取りに来ててください。」

牧畜民は家に帰った後、明日「先生」がやってきて本を借りることに思い至るたびに、頭が痛くなった。妻は夫が、浮かない顔をしているのを見て、理由を問いただして、言った。

「それが何だって言うのだい。お前さんは明日出かけて自分のことをしなさい。出かけてしなければならぬことをしなさい。その「先生」とやらが来たら、わたしが相手をしますよ。」

¹⁵ 優れた人物がいないところでは、少々の能力でも威張ることができる。

翌日、案の定、その「先生」は側対歩のウマに乗って、ハエ払いを振り回しながら、得意面々な様子でやってきた。

牧畜民の妻は「先生」がやってきたのを見ると、礼儀正しく出迎えた。しかし、「先生」はウマから降りると、彼女を見ようともせず、言った。

「バカな女よ、お前さんの、あのでたらめを言っていた奴は家にいるか？わたしはあいつが昨日でたらめを言った本を借りに来たのです。」

「主人は家におりません。」

「どこに行った？」

「フンの根っ子を拾いに行きました。」

「なにい？フンの根っ子を拾いに行った？フンはフンだ。どこに根があるのだ？」

「なら、お前さんが言うでたらめは本による必要がありますか。でたらめはでたらめです。どんな本によるのですか。」

「先生」は妻の話に言外の意味が含まれているのも分からず、逆に俺さま「先生」の学問を尊敬していると思い、すぐに鼻高々になった。「先生」は一步一步頭を揺らしながら、得意そうに、家の門に来ると、片足を門の敷居につき出したまま、突然、歩みを止めて、わざと牧畜民の妻に尋ねた。

「バカな女、お前さん、当ててごらんなさい。ちょうど今、わたしはいったいこの門に入りたいか。それとも、この門に入りたくないのか？」

牧畜民の妻はこの「先生」がわざとからかっているのが分かり、指で庭の中のもうすぐ出産しそうなメスヒツジをゆび指しながら言った。

「おまえさんが先に当ててみてください。わたしの家のあのヒツジのおなかにいるのはメスですか、オスですか？」

「先生」はしばらく目をむいたが、答えられなかった。だが、やっぱり知ったかぶりの様子をやめることなく、また尋ねた。

「お前さん、当ててみなさい。わたしはおなか为空いているでしょうか。それとも、のどが渴いているでしょうか？」

牧畜民の妻はこの「先生」の「学問」も大したことがなく、しかも、少しも礼儀がないのを見て、庭の外の後ろ足を広げて踏ん張る1頭のメスウシを指で指しながら言った。

「お前さんが先に当ててみなさい。あのメスウシは糞をしようとしているのか、それとも尿をしようとしているのか。」

「先生」はここに至って、ようやく自分が先生の風格をなくしていることに気づき、恥ずかしくて向きを変えて出ていき、ウマに乗って、逃げて行った。

（9）「先生」、ロバを買う

あるところに自分を「先生」と呼ぶ人がいた。その人は少し字を覚えただけで、自分は常々大変学があると思うようになった。しかも、得意になって自分の「学」をひけらかすのを好んだ。

ある日、「先生」は市場でロバを 1 頭買った。市場の規則にもとづき、証文をかわすことで、売買契約とする。ロバの売り手は読み書きができないので、ちょうどよく「先生」に「学問」をひけらかす機会を与えることになった。

「先生」は筆、墨と紙を取りだして、「サッ、サッ、サッ」と紙いっぱい一気に文字を書いた。ロバ売りは袖をたくしあげ、前に進み出て、サインをしようとする、「先生」は首を横に振りながら言った。

「ちょっと待ちなさい。まだありますから。」

「先生」は 2 枚目の紙を取り出すと、筆をとってまた書き出し、紙いっぱい一気に書きつけた。今度は、ロバ売りが口を開くのを待たずに、「先生」は我先に言った。

「急がないで。まだ書き終わっていませんよ！」

3 枚目をやっと書き終えた。ロバ売りは、今度こそは書き終えたに違いないと考えた。ところが、思いもよらず、「先生」はサッと 4 枚目の紙をまた取り出した。ロバ売りはこらえきれずに尋ねた。

「まだ書くのかい？家畜の売買は証文を書いて、それで買主と売主に精算がおわったということを説明して、今後お互いにトラブルが生じないようにするものではないのかい？他の人が書いているのを見ているが、1 枚の紙でさえ使い切らない。なぜおまえさんはあろうことか 3 枚の紙にまるまる書いてもまだ書き終わらないのかい？」

「先生」は得意そうに首を横に振りながら言った。

「おまえさんは今度のことでようやく分かっただろう？わたしは大変な学がある人物だから、当然書いたものを普通の人と比べることはできませんよ。お前さん、よく見なさい。下にわたしが書こうとしているのはわたしたちが売買したロバの「ロバ」という字です。

「なんだってー？」

ロバ売りは心底驚いた。本来、「先生」が紙いっぱい書いた 3 枚には、自分たち 2 人が売買したあのロバの「ロバ」という字がないなんて。

(10) 3年前のキツネの足跡

ある猟師が狩りに出かけて、キツネの足跡を見つけた。足跡をたどり、数十キロ探した。しかし、キツネの足跡を見失ってしまった。猟師がほうぼう探しまわっているところへちょうど向こうからラマ僧がやってきた。猟師は前にあゆみ出て、うやうやしくお辞儀をした。あいさつをかわしてから、キツネの足跡を見たことがあるか尋ねた。

ラマ僧は言った。

「キツネの足跡だけでなく、キツネの影を見たことがありますよ。」

そう言うと、危険をかってでて猟師を連れて、荒涼たる砂漠¹⁶を歩いて行った。

猟師はラマ僧についてしばらく探したが、キツネのわずかな手がかりさえ見つけられなかった。猟師は疑問に思っただけでラマ僧に尋ねた。

「ラマ僧さま、キツネの足跡と影を見たのはいつですか？」

ラマ僧は頭をたたいて、しばらく考えてようやく言った。

「ああ、おそらく3年前でしょう。」

《原典》原題「三年前的狐踪」104頁。パーパー（著者の父）口述 1990年収集

(11) お前がいてもいなくても、いつものように年を越す

牧畜民のダランテイはいつも猟銃で狩りを好んだが、収穫はわずかだった。旧暦の12月29日にちょうどボタン雪がたくさん降った。ダランテイは心の中で今日外に出たらいいことがあるだろうと考えた。ダランテイは猟銃を背負って、でこぼこ道を歩いて平野にむかった。突然、近くの雪の積もったところでウサギの2つの耳が飛び出ているのを見つけた。ダランテイは心の中でつぶやいた。「おまえさん、どこに逃げていくのか？」ダランテイはすばやくウサギに向かって一発撃った。そのあと、走っていきウサギを拾い上げて懐の中に入れた。懐を撫でながら、独り言を言った。「今年はいいい年越しができそうだ。このウサギ肉を酒のつまみにし、ウサギの皮はタバコ2箱と交換できる。」

まさにダランテイが目を閉じて、うっとりしていたとき、懐の中のウサギが逃げ出した。ウサギは実は凍えて動かなくなっていただけだった。ダランテイが我に返ったときにはウサギはすでに遠くに逃げ去っていた。遠くに去って行くウサギを眺めながら、ダランテイは一顧だにしない様子で言った。

「何でもない。逃げるなら逃げろ。お前がいても年を越す、お前がいなくても、いつものように年を越すぞ！」

《原典》原題「有你没你照样过年」105頁。銭世軍口述 1990年収集

¹⁶ 原典は大沙巴拉ルで、モンゴル語オルドス方言、da shalbar を音訳したもの。荒涼たる砂漠、大砂漠、不毛の地、不毛の砂漠の意（私信、サランゲレル教授）。

(12) 聞けば聞くほど亡くなった夫を懐かしく思う

王二狗は蛇皮胴の三弦の弦楽器を弾くのが好きだったが、メロディーを奏でることができなかった。だが、彼は自分では上手だと思っていた。

ある日、彼は突然奇妙な考えを思いついた。村で個人演奏会を開くのである。村人たちは皆自分の小さな腰掛けをもって聞きに来た。しかし、少し聞いただけで、皆続々と帰り始めた。最後にただ一人残ったのは年を取ったおばあさんだけだった。彼女は聞きながら涙を拭っていて、とても悲しんでいた。王二狗は考えた。「ショウガは古いほど辛い（亀の甲より年の劫。年寄りほどやることが老練だの意）。このおばあさんだけが本当に音楽を、芸術を理解できるのだ。」そこで前に進み出て尋ねた。

「おばあさん、他の人はみんな聞いても理解できずに行ってしまいました。おばあさんだけが残っています。わたしが弾いた曲はあまりにも感動的でしたか？」

おばあさんは悲しそうな様子で言った。

「ああ、若いのは知らないのです。わたしの夫は生きていたとき、綿打ちをしていたのです。お前さんが三弦を弾く音はバン、バン、バン、バンバンバンと、わたしの亡くなった夫が生きていたときに綿打ちをしていた音です。わたしは聞けば聞くほど亡夫を思い出します。」

《原典》原題「越听我就越想我那死鬼」107頁。銭世軍口述 1990年収集

(13) 今の運転手は怠け者すぎる

王おじいさんははじめて車に乗ったとき、運転手はクランク棒を40、50回まわしてようやくエンジンがかかった。2回目に車に乗ったとき、運転手はクランク棒を2、3回まわしただけで、エンジンがかかった。しかし、不運にも、その車は路上で故障してしまった。王おじいさんはため息をついて言った。

「ああ、今の運転手はものぐさすぎる。前回わたしが車に乗ったときは、運転手は40、50回まわして、道中、問題なかった。しかし、今回、運転手は2、3回まわしただけで、ちゃんと力を入れていない。それならば壊れないはずがないだろう？」

《原典》原題「现在的司机太懒了」106頁。銭世軍口述 1990年収集

謝辞

原著は翻訳者が2001年ウーシン旗でフィールド調査中に入手したものである。寄贈者に心よりお礼を申し上げる。地名についてご教示いただいた中央民族大学サランゲレル教授に深くお礼を申し上げます。翻訳は内陸アジア文化論演習で進めた。ゼミ生およびティーチングアシスタントのスルナサ

んにも感謝の意を記したい。

引用文献

稲田浩二（1988）『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』同朋舎。

ウター、ハンス＝イェルク、加藤耕義訳、小沢俊夫日本語版監修（2016）『国際昔話話型カタログ：アンティ・アールネとステイス・トムソンのシステムに基づく分類と文献目録』小澤昔ばなし研究所。

児玉香菜子（2012）『脱社会主義政策』と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容：オールド地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会：名古屋大学文学研究科比較人文学研究室。

児玉香菜子・サランゲレル・アラタンツェツェグ（2014）『極乾内モンゴル・ゴビ砂漠、黒河オアシスに生きる男たち 23 人の人生菜子』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明叢書 10, 名古屋大学文学研究科比較人文学研究室。

児玉香菜子訳（2016）「オールドス民話収集（1）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』18:121-140。

——（2018）「オールドス民話収集（2）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20:323-339。

——（2019）「オールドス民話収集（3）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21:181-199。

——（2020）「オールドス民話収集（4）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』22:389-408。

小長谷有紀（1998）「モンゴルの葬送儀礼」『国立民族学博物館調査報告』8：165-182。

駒田信二編（1978）『中国笑話集』講談社。

趙永銑他編、邢志強監訳、珠栄嘎・竹中良二訳（2002）『中国蒙古（モンゴル）族の物語』日本僑報社。

モスタールト、アントワーンヌ、村上正二訳（1986）「オールドス・モンゴルに関する民俗資料」『モンゴル研究』17: 81-106 (Mostaert, A. (1956) MATÉRIAUX ETHNOGRAPHIQUES RELATIFS AUX MONGOLS ORDOS." *Central Asiatic Journal* 2-4: 241-294)。

銭世英（1999）『鄂尔多斯民间采风』内蒙古人民出版社。

（こだま かなこ・千葉大学人文科学研究院）

Collections of Ordos folktales (5): Qian Shiyong, 1999, Huhhot

KODAMA, Kanako

This text is a partial translation of "Ordos Folklore Collections" (published by Inner Mongolia People's Press, 1999). The original title is "鄂尔多斯民间采风 (Eerduosi minjian caifeng)" in Chinese, and the text is edited by Jagas (Mongolian name) who went by the pseudonym of Qian Shiyong. The original manuscript was written in Chinese. This book contains eighty-six folktales collected in the Ordos district of the Inner Mongolia Autonomous Region, China, and arranged by editor. The prominent place of the collection is probably the author's hometown of Üüshin (Wushen) Banner in the Ordos district. The folktales fall into one of three categories: folktales about animals and plants (28), folktales about people (34), and myths (24). I translated thirteen of the folktales about people.

The folktales translated here are primarily categorized as "humorous tales." The main theme is cheapskates, laziness, and fools. The first tale, "The clever young disciple lama (Mongolian monk)," is about a young lama maltreated by a stingy older teacher lama who retaliates with words. There is a similar tale in Japanese folktales, but uses a horse in the context of the tale compared to a camel in this first tale. The second tale, "Three sons acquire skills," is about a rich man who is stingy and shows off the "skills" that his fool sons have acquired. The third tale, "One penny," is also about a rich and stingy man who dies for a penny. The fourth tale, "A millstone gnaws a bone," is about a skilled craftsman who admonished a stingy liquor store owner. These four folk tales have a commonality that the one of the protagonists is stingy. In particular, the protagonist of the second tale is very stingy to his employees as well as beggars, which is probably why his end is so tragic. In the fifth tale, "Three lazy men," the three main characters die because of their laziness. In the sixth tale, "The mayhem of an egg," a poor couple dreams of becoming rich from an egg, but they quickly lose it. The seventh tale, "A young man's zodiac sign is naan bread with sheep's dungs," is about a young man who looks beautiful but has a terribly bad memory. The eighth and ninth tales are about a self-proclaimed "teacher" who acts as if he is learned even though he is not. The tenth to thirteenth tales are short tales. The tenth and eleventh tales have a hunting setting. The mention of automobiles in the thirteenth tale suggests that this tale is relatively new (i.e. 20th century).

The first, second, seventh, eighth, tenth, and eleventh tales are set in the Mongolian region, based on the appearance of Mongolian livestock (camels, cows, and sheep) and the main characters'

names. The third, fourth, sixth, ninth, twelfth, and thirteenth tales are set in China, probably in Shanxi Province, adjacent to the Üüshin Banner, which is the main recording site. In the fifth tale, there are no words that indicate any particular place.

The narrators of all the stories except for ninth, eleventh, twelfth, and thirteenth are the father, mother, or aunt of the editor, Qian Shiyong. The narrator of the ninth tale is Zhao Qixiong, which is a Chinese name. The narrator of eleventh to thirteenth tales is Qian Shijun. The name Qian Shijun is one letter different from the editor's pseudonym Qian Shiyong, so it is likely that the narrator is a family relative of the author and is probably a Mongol.

The characteristic of these thirteen folktales is that, except the fifth tale, they are clearly set in either a Mongolian district or China. Some tales are set in China even though the narrator is Mongol. However, it is unclear whether the folktales were narrated in Mongolian or Chinese language. In addition, the tales were collected in Ordos, which is one of the first regions in Inner Mongolian district under sedentarization, and there are descriptions of *kang*, a heatable brick bed, and the threshold of a herder's house that suggest that the area has been under sedentarization.